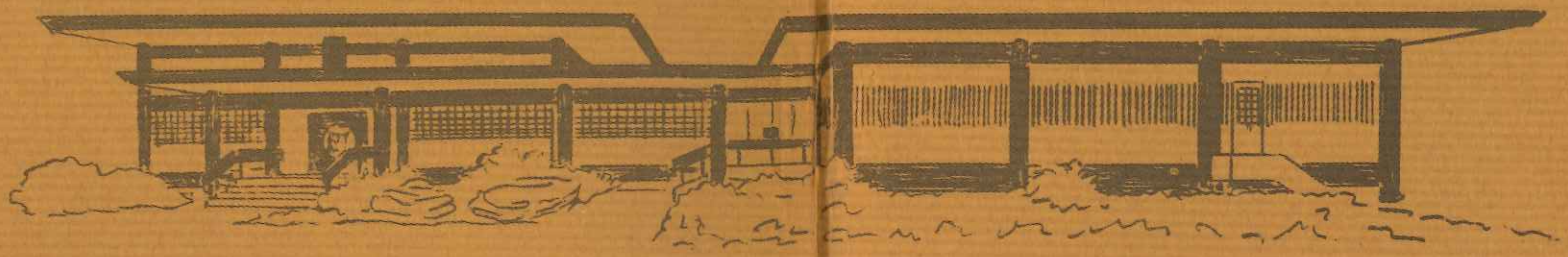
善永



宗祖七百回大遠忌法要
本堂庫裡落成慶讃法要

記念

昭和 44 年 10 月

真宗々歌（真宗各派協和会作詞）

一、ふかきみ法に　あいまつる
身の幸何にたとうべき
ひたすら道を　ききひらき
まことのみむね　いただかん

二、とわのやみより　すくわれし
身の幸何に　くらぶべき
六字のみなを　となえつつ
よのなりわいに　いそしまん

三、海の内外の　へだてなく
みおやの徳の　とおとさを
わがはらからに　伝えつつ
浄土の旅を　共にせん

高輪山　善永寺

所在　東京都大田区萩中一丁目二番二四号
所属　浄土真宗　本願寺派
創建　建長年間（一二四九―一二五六）
武蔵国　品川　高輪台
（創建当時は浄土宗鎮西派）
開基　慈信房善鸞
（宗祖親鸞聖人の第三子）
改宗　慶長年間（一五九六―一六一五）
善永寺浄宗

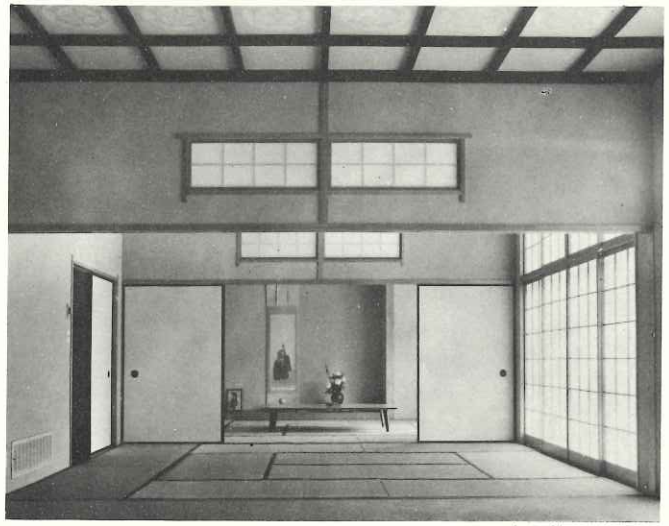
善永寺初代浄宗
慶長一二（一六〇七）年寂

本　堂

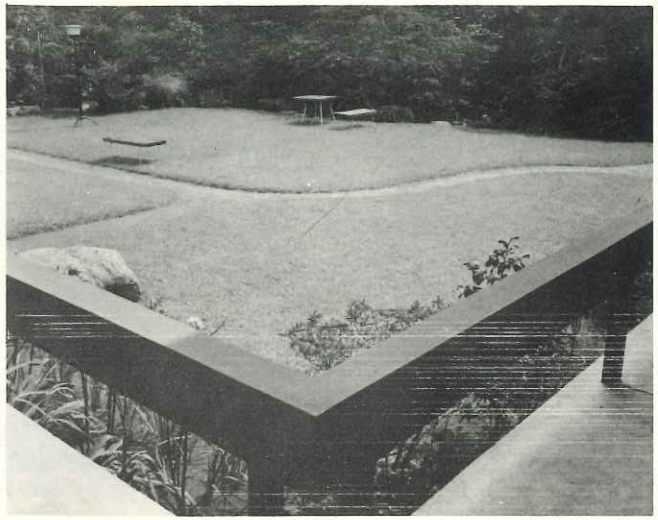
幼稚園・ボーイスカウト　43年　報恩講

内　陣

書　院　を　望　む



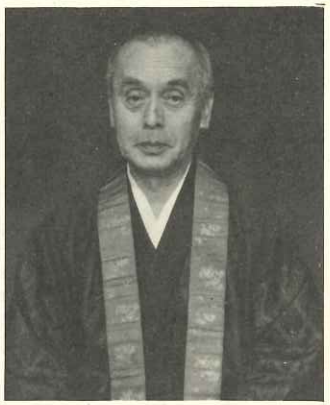
書　院　内　部



善永寺庭園

ご挨拶

善永寺第十九世住職　高輪淳資
後嗣　高輪淳一



このたび、みなさまがたの御懇念のたまものとして本堂、庫裡の完成を見ましたことはまことに御同慶にたえません。

落慶法要と共に、宗祖であり、当寺開基善鸞の父、親鸞聖人の七百回遠忌法要を勤修させていただくことは、何よりもの喜びであります。

風雲星霜七百年のうつりかわりのいろいろを不完全ながら小冊子にまとめました。ご覧いただきたく存じます。

昭和四十四年　十　月

庫裡

浄土真宗の教章（私の宗教）

一、宗名　浄土真宗本願寺派（西本願寺）
一、宗祖　見真大師親鸞聖人（一一七三―一二六二）
一、本尊　阿弥陀如来（南無阿弥陀仏）
一、経典　浄土三部経　佛説無量寿経（大経）
　　佛説観無量寿経（観経）
　　佛説阿弥陀経（小経）
一、教義　南無阿弥陀佛のみ教えを信じ、必ず佛にならせていただく身のしあわせを喜び、つねに報恩のおもいから、世のため人のために生きる。
一、宗義　宗門は同信の喜びに結ばれた人びとの同朋教団であって、信者はつねに言行をつつしみ、人道世道を守り力を合わせて、ひろく世の中にまことのみ法をひろめるように努める。また深く因果の道理をわきまえて、現世祈禱や、まじないを行わず、占いなどの迷信にたよらない。

浄土真宗の生活信条

一、み佛の誓いを信じ、尊いみ名をとなえつつ、強く明るく生き抜きます。
一、み佛の光をあおぎ、常にわが身をかえりみて、感謝のうちに励みます。
一、み佛の教えにしたがい、正しい道を聞きわけて、まことのみのりをひろめます。
一、み佛の恵みを喜び、互にうやまい助けあい、社会のために尽します。

善永寺誌

一、開基　慈信房善鸞

当寺由緒書（龍谷大学図書館蔵）に依れば建長年間（鎌倉中期約七二〇年前）親鸞聖人の第三子善鸞が品川高輪台に創立、高輪山善永寺と称したのに始まる。

本願寺通記第五巻暦代宗主伝の善鸞の項に

仮名は宮内卿、遁世して慈信房と号す、高祖の第三子なり、即ち庭訓を蒙り頗る浄教に霑う、かって使命を奉じて関東に弘化す。然るに宗教にそむくこと有るを以て法を嗣ぐことを得ず。

とあり、その子の如信上人が本願寺第二祖を嗣いでいる。但し真宗一〇派の中、山本派と出雲路派の本山では善鸞を第二祖としている。

建暦二年（一二一二）生れ、弘安九（一二八六）年三月六日、奥州大網にて逝く。年七〇才

善鸞と如信上人終焉の地、奥州大網の常瑞寺は、祥しくは、善永院常瑞寺と称している。

善永寺由緒書（龍谷大学図書館蔵）

本願寺通記には山科連署記を引用して「善鸞入道して善永寺という。今江戸築地別院境内に善永寺有り。或は遺跡の移転を伝うるものなり」とある。

善鸞は本願寺より敬遠されているが、次の最須敬重絵詞や慕帰絵詞等を見ると、あながちそれは当らないように感ぜられるものである。

最須敬重絵詞　第五巻第十七段に

大和尚位（勘解由小路宗昭）鎌倉をすぎ給ひけるに、おりふし守の殿（善鸞）の御浜出でとて、ひそめきさわぐを見給ひければ、塔の辻より浜際まで数多の勢、みちもよけやらずつづきたり。その為体僧尼士女あいまじわり、たれぎねをたれてみな騎馬なるが二三百騎もやあらんとみえたり。その中にかの大徳（善鸞）もくわはられけるが、聖人よりたまはられける無碍光如来の名号のいつも身をはなたれぬを頸にかけ、馬上にても他事なく念佛せられけり。又常陸の國をとほり給ひけるにも、その比、小田の總領ときこへしは筑後の守知頼の事にや。かの人鹿島の社へ参詣の時にも同道せられけるが、その時も、本尊の随身といひ騎中の称名といひ、関東の行儀に少しもたがはず、両度ともに通りあひて御覧じ給ひければ、心中の帰法は外儀の軽忽にはたがはれるにやとぞその給ひしと云々。

慕帰絵詞　第四巻

（勘解由小路宗昭法師）常陸に村田といふあたりを折節ゆきすぎけるに、ただ今大殿（善鸞）の御浜出でとて男法師尼女たなびきて、むしといふ物をたれて、二三百騎にて鹿島へ参らせ給ふとておびただしくののめく所をとおりあひけり。大殿と号しけるも、辺土さながらかの堺なれば、先代守殿をこそさも称すべけれども、すこぶる國中帰伏のいたりにやと不思議にぞあざみける。かかる時も他の本尊をばもちゐず、無碍光如来の名号ばかりをかけて、一心に念佛せられけるとぞ。

下野國高田顯智房、京都五條西洞院の聖人の偶居にて、或冬の事なりけるに、爐辺にして対面ありて、聖人と慈信法師（善鸞）と、お顔と顔とをさしあわせ、御手と手ととりくみ、御額を指合て何事をか物を密談あり、其時しも顯智ふと参りたれば、両方へのきたまひけり、顯智大徳、後日法師に語示しけるは、かかることをまさしくまいりあひてみたてまつりし、それよりして何ともあれ、慈信御房も子細ある御事なりと云々。

（中略）彼慈信房おほよそは聖人の使節として坂東へ差向たてまつられけるに、真俗につけて、門流の儀にちがひこそ振舞はれけれども、神子巫女の主領となりしかば、かかる業ふかきものにちかづきて、かれ等をたすけんとにや、あやしみおもふものなり。

善鸞は父親鸞と思想的に対立して義絶されたと伝えるが、右の史料からみると、善鸞の信仰は父親鸞のそれと異なるところがなかったことが知られる。

二、高輪時代

善鸞が高輪に当寺を創建、浄土宗鎮西派の流れを汲んで以来、慶長年間まで約三五〇年の間は当寺に記録がなく、他寺院の記録により知られるところをしるす。

品川区北品川に真宗大谷派の正徳寺がある。正徳寺寺伝によれば、元徳二（一三二八）年―後醍醐天皇の頃―善永房春応が品川八ツ山に真言宗善永寺を創立、大日山（八ツ山の古名）と号したが、元亀二（一五七一）年現在地に移り、正徳二（一七一二）年、大谷派に転じて日夜山正徳寺と称することとなったと伝えている。

八ツ山は高輪と隣接の地であり、正徳寺の創建も当寺と何らかの関連があったことを思わしめるが、当寺由緒書によれば慶長一二（一六〇七）年、当寺は高輪に所在しているから、正徳寺の前身の善永寺は別寺のように思われる。或は正徳寺開基善永房春応が当寺より出たと考えることもできる。

善福寺系嗣によると

第十五世善海、初めには善永寺住たりといえども、堯海改派退院の後、血脈の縁を以て移転して当寺住持となる。

とあり、善海は十三世祐海の弟であったが、一四世堯海が大谷派に改派してしまったので先住祐海はこれを隠居せしめ、善永寺住職となっていた弟の善海を呼び戻して十五世を継

がせているのである。

善海は元和三（一六一七）年三月一四日、六三才で歿している。後に述べる善永寺を浄土真宗に改宗した初代善永寺浄宗が慶長一二（一六〇七）年六月一一日に歿しているから、初代浄宗より以前の善永寺住職としなければならない。また善福寺系嗣によると、善海の長女は善永寺室となっているから、第二世善教の室とみるのが妥当と思われる。

善永寺の浄土真宗への改宗は慶長年間であるが、この改宗の事情は、東西本願寺の分立、創設期の幕府と東西本願寺の政治的諸関係と密接な関連がある。

徳川家康が江戸に封を受けてから、本願寺は東西に分裂した。

戦国時代の本願寺は今の大阪城のところにあり、石山本願寺と称していたが、織田信長がこれを攻めて、石山戦争が十一年も続けられた。信長は正親町天皇の勅を仰いで講和をはかり、当時の門主第十一世顯如上人はこれに応じたが、息教如上人はこれに従わず戦争を継続した。顯如上人は紀州鷺の森に退いたが、信長再度の懇請に教如上人も、城明け渡しの止むなき破目になり父の許に退いた。信長は本能寺の変に歿し、豊臣秀吉の世となって、秀吉は本願寺に京都六條堀川の寺地（今の西本願寺の所）を献じ、建物を寄進して大いに庇護した。

教如上人は隠居の身となり本願寺の裏御殿に居住されたが、顯如上人の御往生後、一時

本願寺第十二世門主を継いだ。所が顯如上人の室如春尼は顯如の譲り状を持ち出して、本願寺の後継者は第三子准如であることを発表し秀吉に依頼して教如の隠居を迫った。秀吉は教如に対して、一〇年後に本願寺を弟准如に譲ることをすすめた。教如は応じなかったが、閏九月教如は秀吉の権威に屈して即時隠居するの余儀なきに至った。

長男であり、一且は本願寺を継いだのに、突如隠居の身となったものであるから、世間一般の同情が教如に集ったのは当然であり、家康父子は教如側であり烏丸六條、七條の寺地を寄進した。

山科言経の日記、慶長元年十二月十三日の條

江戸中納言（徳川秀忠）隠居門跡信浄院（教如）へ茶湯に御出

慶長三年十二月十日の條に

江戸内府本願寺隠居（教如）へ御出

家康秀忠は教如を訪ねているが准如の許えは来ていない。

四年正月十日の條によると准如の本願寺へ

江戸内府、当春御出有るべき由

であったが、其後家康来訪の記事が見えないから、遂に沙汰やみになったものか、家康の准如に対する感情を示しているものと見て差支えない。

慶長五年八月家康の奥州出陣に教如は家康を陣中に見舞ったが、准如は石田三成の命に応じて、奥州下向の途中、三河岡崎から引き返して遂に家康に礼をつくさなかった。

更に九月の関ケ原の合戦に本願寺の家臣下間某が豊臣方として参加した事、及び大垣城に鉄砲玉薬を送った事、或は豊臣側の安國寺恵瓊を寺内の端坊明勝が隠匿したこと等は、家康の心証を害したものの如く、ために准如は十月二日家康を大阪に訪ねて、百方弁解を試みたが、その結果十一月十九日の條に

一、西御坊より本門跡内府へ御礼相済の由これあり、去月二日より大坂なり、相調之由申承了

とあるから家康の諒解を得るためにかなりの日数を要したらしい。

其後も教如は家康の庇護を得て、益々発展の一路を辿ってゆく。

従って、ここ江戸に於ける教如の東本願寺の坊舎は既に慶長見聞集の記事となっているほどであるに反し、西本願寺の支坊浅草御堂（浜町御坊）の創建を見たのは、実に家康薨去の翌年元和三年

准如上人御影

であった。

准如は徳川氏の同情を得ていなかったため江戸下向の途中品川まで来ても府中に入ることを阻まれたこと二度、三度目にやっと府内に入ることが出来た。

善永寺由緒書によれば

中古俊光院様（信光院―准如）将軍家へ御対顔の為御参向遊ばされ候節、御府内多分裏方（東本願寺派）に相成り、余残の輩、御末寺も公辺の御首尾如何と怖れ、御旅館仰付らるべき寺も相見え申さずに付、拙寺に御滞留遊ばされ、真宗の奥儀御教化遊ばされ候へば、時の寺務浄宗、古徹を改め、御末寺に相成り、是より浄宗種々心を尽し相働き、公辺の首尾相調え、御対顔も相済み、御満悦の余り、数多の法物下し置かれ候

准如上人が将軍家御対面のために江戸に下向されたが、江戸の浄土真宗の寺院はほとんど東に転派しており、また幕府の意向をおそれてお宿するところもなかった。こうして品川高輪の善永寺に滞留された准如上人は、ここで浄土真宗の奥儀を御教化されたので、時の住職善永寺浄宗は浄土真宗本願寺派に改宗し、准如上人のために働き、幕府に働きかけて、将軍家への対顔も無事に相済んだ。准如上人も大いに喜ばれて、多くの法物を下され更に院家も許されようとされたが辞退して、内陣列座を許された。

ところで右の法物のうち、親鸞聖人御影は現存するが、その裏書は

釋　准如　花押

慶長十二丁未年六月十一日
武州豊島郡江戸郷
善永寺常住物也
願主　釋　浄宗

親鸞聖人御影

となっている。従って善永寺の改宗は、慶長一二（一六〇七）年以前のこととみられる。

改宗によって浄土真宗、善永寺が設立され、浄宗を以って初代住職とすることになった。

前述の善海は浄宗の前住とみられるが、麻布山善福寺十五世住職に戻り、その長女は善永寺第二世善教の内室であり、浄宗とも親交があったと思われる。善福寺は家康が鷹狩りに数度出かけて立寄っており、家康の朱印を載き、境内並に拾石の寺領の寄附を得ていることから、善福寺の支持は、浄宗の徳川家と本願寺の間の斡旋には好都合であったと思われる。

三、浜町御坊創建

西本願寺の江戸における支坊は浜町御坊を以て最初とする。元和三（一六一七）年、善永寺第二世善教は品川の寺地を上地して、横山町二丁目南側に浜町御坊（浅草御堂）の創建に尽力し、落成と共に寺中として移転した。

新井白石の白石紳書には

西本願寺のかけ所は、善養寺と云う一向僧、東の寺建立を見て、公へ願ふて取立たる也

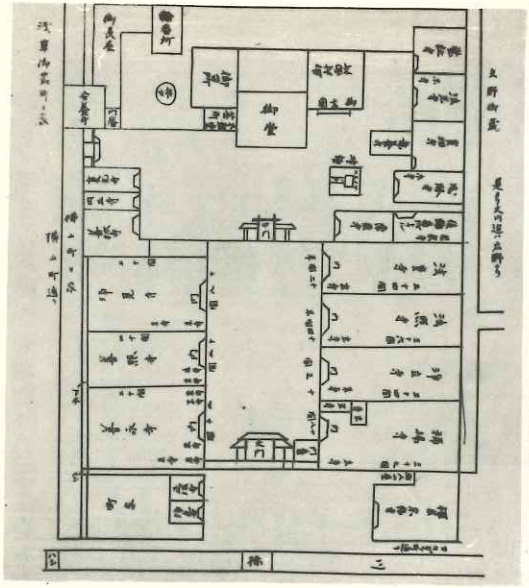
と記している。当時真宗に善養寺なる寺は存在しないから、寺伝と合わせ考えると、紳書の善養寺は善永寺のことと思われる。

幕府に上地した旧高輪の境内地は、その所在が不明である。

東海寺地内時雨寺住職であり、早稲田大学文学部長をされていた伊藤康安氏は、港区高輪三丁目の東禅寺が、約三百年前に赤坂霊南坂より幕命によって移転したことを指摘され、旧善永寺境内地がこゝであったのではなかろうか、また東禅寺の庭は移転以前よりのものであると申されている。時期的にみて考えられることである。雑誌大法輪の記事中にも、東禅寺の庭は東京でも唯一の京都式の庭であるといっているが、善鸞の後継者が京都より庭師を呼んで築庭したことも考えられる。善永寺の境内には、善鸞当時三百騎が始終集っていたといわれ、広大な寺地であったと想像されるが、東禅寺境内も三万坪であり、善永寺の跡地に幕命により東禅寺が移転したと考えても不都合ではない。

四、築地時代

明暦三（一六五七）年正月一八日、明暦の大火（振袖火事）のため、浜町御坊も寺中善永寺も残らず類焼、幕府は道幅拡張、町屋建築条令を出して復興に当った。御坊も当寺も



浜町御坊並びに寺中寺院配置図

―法光寺蔵

善永寺末寺

浜町御坊時代の図面によると、五ケ寺の末寺を有していたことが知られる。寺域僅か間口、奥行共に二〇間の狭隘の中に、中山（本山と末寺の中間に位置する）善永寺の外に五ケ寺を包含していたのであるから微々たるものであったと思われる。この末寺も築地時代には独立した寺地を与えられた。

二世善教……織田信長の孫……

善教は織田信長の子、織田信雄の嫡子で、出家して相州長井長徳寺四世住職を継ぎ、誓念と号したが後武州江戸善永寺第二世住職となり、善教と号した……長徳寺文書……

父信雄は秀吉と対立し、家康と深交があった。また叔父織田有楽斉も家康と交わり、江戸に広大な土地を受けて茶事幽雅を楽しんで後半生を送っている。有楽町数寄屋橋の地名は今も残っている。

善教も従って幕府との関係は深かったと思われる。

横山町の跡地への復興を許されず、築地海辺に方百間の土地を与えられたので埋立工事を起し、現在の本願寺築地別院の誕生をみたものである。当寺もこれに従って再度の移転を行なった。第三世教意の時代である。

（上図　築地別院各寺配置図）

築地に於て善永寺の占めた位置は表門を入って左側であり、通記には、

一に云わく、浜町に於ては、善永、妙延、称揚、実相四寺の敷地を合わせて御坊を創建す。故に築地に移るに及んでは、その旧功を以て、表四箇寺となす。

といい、浜町御坊創建の功により、正面に位置を占め、表四箇寺と称したと伝えている。

第三世教意の時、寛文三（一六六三）年武蔵野西久保新田村に善永寺下屋敷を作った。こゝは善永寺門徒高橋八郎兵衛の所持する土地であったが、子孫が断絶したので、永代祠堂として寄附されたものである。寛文三年二月一五日、

寺地五反の除地が許され、それより留守居一名を派遣し、寺僧を通わせてこの地域の教化に当った。

第四世教空・第五世超周・第六世教瑑（てん）についてはその所伝を欠いている。第七世教伝は享保一九（一七三四）年三月一四日、養子として入寺、住持を相続している。

第八世教識は甲斐新倉正福寺より入寺し、幼時より教伝の養子とされたようである。十七才で得度、宝暦八（一七五八）年三月一七日住持を相続した。

教識は善永寺中興と仰がれるが、安永六（一七七六）年、院家列座を許されている。現在龍谷大学図書館にのこる善永寺由緒書は、院家昇進の願いに附したものであり、同年七月七日、これを承認されている。

第九世乗識は中興教識の子であるが、住持相続後僅か一年で歿し、天明三（一七八三）年四月、麻布山善福寺二一世臨泉院法海の息清識が善永寺第一〇世として住持を相続した。同年九月二六日には江戸御坊（築地別院）よりの出火で、寺中五十七ケ寺すべて類焼している。新住職にとってその再建は容易なものではなかったと思われる。最初の室は八世教識の娘で、天明六（一七八六）年逝去の後、善福寺の娘を室とした。

寛政二（一七九〇）年、武蔵野西久保新田善永寺下屋敷に寺号の許可を求め、源正寺の設立が許可された。

一札之事

一、就御当家御代々之御厚恩不浅被思召候

一、御公儀軽致間敷従御本寺被仰付御尤至極奉存候其趣堅相守可申候

一、御公儀御法度之趣堅相慎可申候

一、右御通寺之儀ニ付候ては浄土真宗之御寺法勿論御本寺ヨリ、御下知疎略仕間敷候事

一、山林竹木ハ不及申惣而御境内大切ニ可仕候事

右之條々相守対御本寺不儀之義急度仕間敷候仍而誓状如件

寛政元乙酉年三月六日

西久保村
御下屋敷
源　正　寺　印
名主　紋　左　衛　門　印
権　左　衛　門　印
半　兵　衛　印
傳　兵　衛　印

築地　善永寺　様

寛政九（一七九七）年九月、文如、本如の宗主と嗣法の江戸御参向が行なわれたが、当寺文書の一部を抜粋してみると、まずその準備として寺内に水道の敷設を計画している。

水道普請、表町中通四辻ノ所迄水道入、一之井柳ノ下善行寺ノ前、二ノ井善永寺ノ脇、三ノ井西町、四ノ井安養寺、五ノ井長専寺、脇水道請負新橋柏屋卯兵衛方へ申付られ候。金高百九十五両也。善永寺分出限銀六十六匁

九月十七日御参向に付檀家中よりの献上品

一、京春慶御木具　内田清右衛門

御本膳二十膳　御二ノ膳二十膳

御三ノ膳二十膳　御向□二十膳

御通八寸二十膳

一、黒宗和御碗坪平二付　二十人前

一、黒宗和御膳二付　二十人前

一、黒御飯□湯桶鉢台丸盆

右善永寺門徒　内田平兵衛

内田太右衛門　内田吉兵衛

善永寺法物・古文書

本尊　阿弥陀如来　木像（七八㎝）
恵心僧都（源信、九四二―一〇一七）の作と伝える。
浄土宗鎮西派であった創建当初から安置の本尊

親鸞聖人御影　慶長一二年六月一一日　改宗の際、准如上人より御下附「無図の御影」にて、浜町御坊創建の際には、この御影をお掛けしたと伝える。

太子　七高僧御影　慶長一八年癸丑一〇月二十二日
准如様御判

御絵傳　元文五年庚申一二月二五日　湛如様御判

信証院様御影　准如様御判

信楽院様御影　准如様御判

信光院様御影　良如様御判

教興院様御影　寂如様御判

信解院様御影　住如様御判　享保一七年初秋中旬

信暁院様御影　静如様御判　寛保二年壬戌八月一六日

佛宝御免許　宝暦一二年壬午一〇月二六日

教行信証　序文両軸　准如様御筆　焼失

一、代々御免状

一、寛政九年御参向萬記　並ニ水道普請記

一、天保九年御参向萬記

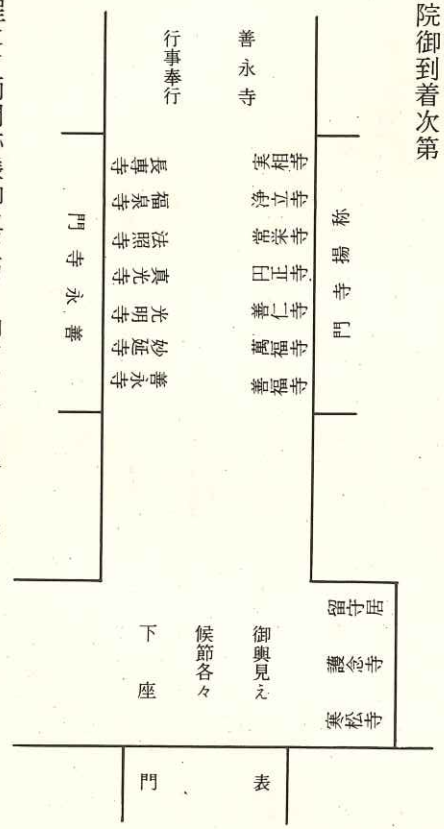
他

内田藤兵衛　内田安兵衛　内田利三郎　内田徳兵衛　西口太兵衛　吉田権右衛門
伊勢屋忠衛門　岩倉屋喜兵衛　内田弥兵衛

尚両門跡御参向については善永寺門徒内儀にまで呼ばれている。門徒内田小四郎、内田安兵衛は、両輪番より厚い挨拶を受けた。

当寺は俗に内田の寺と呼ばれる程内田家一族の護持を受けていたのである。

両門跡築地別院御到着次第



善永寺門中程にて両門跡様御輿立留り御戸開行列奉行披露

第一〇世清識は文化一二（一八一五）年、江戸御坊取締を命ぜられた。文政元（一八一八）年、隠居し、難思院の院号を賜わり、子英識に住持を譲った。第一一世英識は文政九（一八二六）年、弟鏡識（第一二世）に住持を継がせ隠居したが、鏡識は間もなく文政一二（一八二九）年正月に歿している。

この年三月二一日、神田佐久間町より出火、江戸大火となり、築地の全寺院類焼し、当寺は無住中のこととて諸財焼亡してしまった。

天保二（一八三一）年一二月、第一三世住職となった浄識（一〇世清識の子、英識の弟小石川称名寺の養子となっていたらしい）は本堂再建に奮闘し、且つまた築地御坊再建費の内、金壱千両を両院家（善永寺五五〇両、光明寺四五〇両）で負担している。

天保五（一八三四）年正月、漸く本堂、書院等の建築も落成をみたが、忽ち二月一〇日丸の内松平伯耆守邸より出火、再び烏有に帰してしまった。

第一四世永識は越後国頸城郡田海村、西蓮寺の二男で、第一三世浄識逝去の後、弘化二（一八四五）年一〇月、養子として入寺、住持を相続した。（一位を称す）

当代も度重なる天災により災禍を蒙っている。安政二（一八五五）年一〇月二日、江戸大地震により大破した後、翌安政三（一八五六）年八月二五日大暴風雨に見舞われている。復興に檀信徒と共に努力した永識が文久二（一八六二）年六月歿して後は、無住となり、

麻布山善福寺御連枝宝華院殿の舎弟祗麿を養子として育てたが、明治維新となり、一〇才の小児の住持相続は不能となったため、明治二（一八六九）年四月一三日、祗麿を善福寺に返えしている。

五　明治・大正時代

明治二（一八六九）年六月、越中国新川郡若栗村真照寺より養子として入寺、第一五世住職を継いだ高輪円隆を中心として、新らしい時代に即した布教活動が目覚ましく展開された。明治五（一八七二）年二月二五日、会津藩兵屯所より出火、当寺はまたもや全焼、その後復興と共に、明治一三（一八八〇）年九月一三日、善永寺女人教会を設立した。

十五世円隆、同室園林院の努力は園林院と前田候爵家との縁を基盤として上流社会の婦人の聞法の寄合を設けた。会長は伯爵小笠原善照院、二代目会長は同豊子、会員としては清浦伯夫人、三井家夫人、有島武郎母堂其他であって、明治四〇年五月四日より同六日まで勤修した宗祖六五〇回大遠忌法要に同女人教会から寄贈の打敷裏面には次の寄贈会員の氏名を見ることが出来る。

土葬の禁止と青山梅窓院境内墓地

明治七年九月一日より朱引内土葬禁止の令が出され、築地の墓地の土葬は禁止された。このため急遽一〇月駒込逢来町大林寺境内墓地、一一月青山南町四丁目梅窓院境内墓地を借り受け、土葬の分はこゝに埋葬することとなった。駒込大林寺墓地はその後消滅したが青山梅窓院境内には現在でも善永寺墓地が営なまれている。

小笠原豊子　清浦民子　長岡すみ子
安廣愛子（満鉄総裁夫人）　江守糸子　江口千代子
岩谷満寿子（岩谷天狗夫人）　村上琴子　杉谷栄子
中村さき子　吉武ちか子　黒部つね子
鈴木鏡子　阿部多けい子　徳根きし子
鷲見乃ゑ子　林ゆう子　会津千津子
前田千津子　北代なを子　村松とき子
大垣花子　秋田きよ子　國松ふみ子
高島とき子　鬼塚うの子　江守柳子
島田けい子　黒川政子　児玉芳子（吉田松陰の妹）
花田春子　竹内もと子　板倉てつ子
小笠原つる子　高安つね子　野村花子

明如上人は当寺女人教会に、明治一六年一〇月二五日、別掲御消息を下されている。まことに親近感に溢れたものである。

善永寺女人教会御消息

それ佛法に無量の門あり、いずれより入るとも同じく證に至るべし。その中に聖道の諸数は末法の今は証しがたし、就中女人の身は男子にまさりて五障の罪おもく三従の障ふかくいつれの經説によるとも永不成佛ときらはれ女人非器とすてられたり、されば如何なる舟師に値遇してか生死の苦海をわたるべきや。たまたま法華仁王等の經に得益をあらわせどもこれ頓悟の上機にして智慧利根ととき、あるいは権化の人といえり、あに下根下機の女質ならんや、倩女人のありさまを見れば、老いたる人は頭には三冬の雪をいただき腰には四物の弓を張れども猶ねたき心たけだけしく又若き人は朝には明鏡にむかひて青黛の粧をつくろひ夕には衣裳にたきものして馨香の甚しからことを思ひ花よとめでこし程に隙ゆく駒のあがきはやくして、多くの年月をわたりつつ、竟に人間の果報盡きて名残おしくも此世をすてて、みも知らぬ死出の山路に行なやみ、柳の髪のらふたけなるも焦熱極焦熱の炎にとかされ、花の貌ばせのあでやかなるも、紅蓮大紅蓮の氷にとぢられなむ、あさましといふもおろかなり、かかる身ながら佛道を修行し積功累徳の身となることを得んや、しかるに今いかなる宿縁のありけるにや、各他力往生の一流をくみ、専修専念の行者となら

れ候ことよろこばしきことにて候、既に昨夏上京のみぎりにもしたしく申示し侍れとも、こたび文かきてよと乞はるるまま、つたなき筆を染て相承の安心の趣申示し候得ば、能々聴聞あるべく候、抑祖師聖人の己證は、涅槃真因唯以信心にして善根功徳をつむにあらず妄念煩悩をとどむるにあらずただ一念帰命のたちどころに涅槃畢竟の真因を領得するなり。なにのやうもなく、もろもろの雑行雑修自力の心をふりすててかかるあさましき女人をたすけんとて願も行も六字のうちに成就してたすけまします本願なりと信ずる一念のたちどころに佛の方より往生は治定せしめたまひ心光摂護の大益を得、平生業成の安心に住し唯能常称如来号、應報大悲弘誓恩とあれば一期のあひだ、南無阿弥陀佛〳〵と称名相續して、かぎりなき佛恩を報謝せらるべく候、かくの如く弥陀回向の信心によりて生るべからざる真実報土の往生を安堵しぬる上はせめては今世ながらへの間は忠孝貞節の道をつくし子孫教育にをこたらず、無極の朝恩にむくひ心ひろく体ゆたかに命終らばこの臭皮嚢を捨て、精微妙の形を得、永離身心悩、受楽常無間の證を期せられ候やう希ふ所に候也。

あなかしこ〳〵

明治十六年十月二十五日

龍谷寺務　釋光尊　御判

東京有志女人　小寄中

この御消息を拝しても、明治一五年には御親教のあったことが知られる。

明治二一年一〇月築地別院に令女教会が誕生したが、この結成に当っては善永寺女人教会々員が多く令女教会々員を兼ねたもののようである。

第一五世円隆は本山学林にて七年間修学、また嘉永元年より五年間、熊本順正寺司教律梁について修学した学僧で、明治五年少講義を拝命し、布教に努めた。また東京府下第一組組長、積徳教校副監、東京府下総組長を勤めている。明治二九年六月一一日、副住職板敷倫雄に住職を譲り隠居した。(明治三七年助教を授けられている)

第一六世住職板敷倫雄は一五世円隆の甥に当り、常陸国新治郡恋瀬村、板敷山正行寺(後に大覚寺と改む)住職板敷円性(高輪円隆の弟、富山県新川郡若栗村真照寺川崎蔵界、三男)正行寺は円性の弟、公亶(こうび)を養子として継職させ、上京して善永寺副住職を勤めていたものである。室よしは神奈川県三浦郡吉井村法善寺、吉氷爾凝の長女で、板敷籍に入籍上京して倫雄と共に善永寺にあり、第一六世坊守となった。

第17世智訣　大正7. 3. 12

第17世智訣　辞世　大正7. 3. 15

明治三三年七月二二日、一六世住職板敷倫雄四〇才を以て往生を遂げたので、室よしは高輪籍に入籍、板敷公亶の三男性海を養子とし、前住円隆は再度善永寺住職を継職せざるを得なかった。

明治三三年一〇月、長野県上高井郡綿内村善法寺次男、宇佐美智訣、高輪よしと入籍結婚、善永寺副住職となり、明治四〇年頃第一七世住職を継いだ。大正七年三月、智訣病篤く(胃癌)病床にて最後の写真を撮影、一二日、明如上人御影御紐解法要、高輪性海副住職披露を勤修、さらに御佛の　光のうちに　すむ身には

こころにかかる
くもりをもなし

いたつきの　あるたびごとに
思ふかな　日々にちかづく
西の彼岸(かのきし)

の二首の辞世を遺して三月一八日往生を遂げた。

高輪性海は第一八世を継職したが、大正一二年二月、病気の為退職、八月、智訣長女高輪隆子と、京都市下京区今熊野光瀬寺片岡淳資との結納が取り交わされた。そこへ九月一日、関東大震災に罹り、当寺本堂、庫裡すべて焼失、御尊様・重要書類等は武蔵野源正寺に避難、一時は巣鴨信行寺に避難した。テント生活、バラック生活を経、大正一三年三月仮本堂庫裡の落成をみて、五月別院本堂にて結婚式を挙行、善永寺第一九世住職として高輪淳資が継職、復興・移転・教線拡張の重責をになうこととなった。

六、昭和時代

大震災後の復興に尽力し、善永寺は都心の教線を守ったが、東京の復興と人口の飛躍的増加は東京周辺地域の教線に不足を告げしむるものあり、築地にあっては、日本橋よりの魚河岸の移転と、区画整理による減分の高率による寺域の狭隘は、復興建設を不可能に陥らしめ、ここに移転の止むなきに至った。

昭和二年より移転の業を起し、昭和五年一月現在地（当時は荏原郡六郷町八幡塚字大沼と称す）に寺基を移した。境内地二、〇〇〇坪、当初の建物は二階建四六坪の仮堂舎であったが、（現在の光輪幼稚園の敷地）檀信徒各位の懇念により、昭和七年、現在地に木造の壮麗な本堂、庫裡一五〇坪の堂宇が落成した。境内地の一部を児童遊園に開放し、また

青壮年層の精神修養の場として、弓道場を開設、武徳会と提携して段級審査も施行していた。（善永寺弓道会）

昭和二〇年、太平洋戦争の激化と共に、寺族を南多摩郡七生村平山に疎開させ、住職、坊守、法嗣共共善永寺を守ったが、四月一五日B29の空襲により輪奐の美を誇った堂舎も、またまた烏有に帰するに至った。

防空壕に御本尊をお守り申し上げながら終戦を迎え、昭和二二年築地の家作を売却して仮本堂、庫裡を建築、寺院活動の基盤にあて、寺族それぞれ分担して教化活動に当った。

昭和二三年、混乱期の少年少女に光を与えるために日曜学校を開設、組内七ケ寺協同して少年教化に当った。

「三つ児の魂百まで」といわれる。幼児からの宗

戦災前の善永寺庫裡

教々育の必要を痛感し、昭和二四年八月三一日、光輪幼稚園を設立し、園児、母親の教化に当っている。卒園者既に三、〇〇〇名を越え、現在の園児五〇〇余名、教職員二八名は、合掌に始まり、合掌に終る毎日を送って、佛教保育、特に真宗保育に献身している。

昭和二五年七月、地域にボーイスカウト東京第四五団を設立、住職高輪淳資は団委員長、法嗣高輪淳一は副団委員長として同団の中心となり、青少年の教化指導に尽粋している。「佛と国とに誠をつくす」ボーイスカウト運動は、現代の青少年教化運動の雄である。日本連盟はその功労に報いるため、淳一には郭公章を、淳資には鷹章を贈っている。

昭和三〇年一〇月、法嗣淳一の室として、麻布山善福寺三〇世麻布照海師の長女義子を迎えた。義子は光輪幼稚園主事として幼児教育の指導に当っている。

坊守隆子は「むらさき会」を地域婦人の間に結成、古典文学と謡曲文学の研究サークルを主管している。

明暦以来十指を数える火災・震災・風災、善永寺の寺史は罹災と復興の歴史でもあった。昭和三〇年、不燃の鉄筋コンクリート造り堂舎の建築が始められた。第一期工事は横浜市西区南軽井沢の大須賀喜三郎が請負い、本堂六五坪がまず落成した。特に内陣の木組みの出組、折り上げ格天井小組みが、白木ではあるが美しい。さらに昭和四二年、第二期工事

が格建築設計事務所の設計にかかり、当寺門徒、市川三郎兵衛氏の大五組の施行によって着手され、昭和四四年遂にその落成をみた。この建築は本堂を含めて総面積五八〇m²（一七五坪）直線と列柱によって構成された近代建築であるが、天平期の和様建築、藤原期の寝殿造を彷彿とさせるところがある。本堂も内外陣とも完成され、ほぼ完全に荘厳も整えられた。

これは佛祖の加護は勿論のこと、偏えに檀信徒各位の御懇念のたまものと、感謝に耐えない次第である。

昭和四十四年十月二十六日

宗祖大師七百回遠忌法要

本堂庫裡落慶法要

善永寺第十九世住職　高輪淳資　同委員

同　後嗣　高輪淳一　津田義一　市川三郎兵衛

法要委員長　松本秀三　小林幸之助　坪内才市郎

同副委員長　木下重男　秋田太郎　佐野幸七

入江セン　藤田光彦

吉富一臣　中出唯一

内田きよ　倉友長吉

あとがき

このたびの建築について、その設計に当って下さった、格建築事務所の安井技師、施行に当られた、門徒市川三郎兵衛氏、並に運営推進に当られた、松本秀三奉賛会長、これを支持下さった、木下重男、津田義一、小林幸之助、坪内才市郎、入江セン、秋田太郎、佐野幸七、中出唯一、内田きよ、藤田光彦、倉友長吉の諸氏、特に本誌発行に奉仕して下さった吉富一臣氏に心から御礼を申上げます。

昭和四四年一〇月二六日　山主　高輪淳資

後嗣　同　淳一

善永寺復興建築奉賛会芳名

光輪幼稚園殿
木下重男殿
当山住職
松本秀三殿
市川三郎兵衛殿
坪内才市郎殿
小林幸之助殿
入江セン殿
佐野幸七殿
津田義一殿
秋田太郎殿
小林五郎殿
中出唯一殿
津田正夫殿
河村逸太郎殿
牧野衆一殿
源正寺　上杉泰雄殿

森清一殿
波島満津子殿
宮本佐次平殿
竹村章殿
藤掛一子殿
斉藤辰雄殿
松田盛次殿
安藤千代一殿
津田正男殿
高田博文殿
内田きよ殿
田中秀明殿
五百木一雄殿
倉友長吉殿
平林金之助殿
坂和雄殿
三橋ツル殿

星次雄殿
山手秀世殿
坂功殿
川端己之助殿
稲田勢一郎殿
信行寺　荒川最勝殿
山下政雄殿
岡部孝殿
塚田卯三郎殿
堤定作殿
片山正明殿
藤田光彦殿
石村正幸殿
内田孝一殿
五百木泰孝殿
宮田喜太郎殿
田畑甚太郎殿
岩崎仙太郎殿
山田イト殿

松崎静子殿
滝口さだ殿
竹見康之助殿
田中吉右衛門殿
早川留次郎殿
愛利平殿
井上隆一殿
石川清之助殿
阿部光春殿
宮越博正殿
斉藤健二殿
石塚広殿
沢崎和之殿
石博博殿
木野宏殿
木村登久殿
脇本了殿
池田猪八殿
小林清殿

内田英殿
内田邦夫殿
藤沢要殿
後藤隆殿
高田利通殿
五百木親義殿
利根川はつゑ殿
道浄精一殿
前田陽之助殿
中山源治殿
三井誠殿
佐々木精一殿
大畠登久子殿
川口英一郎殿
高見沢実殿
太田光栄殿
栗田立男殿
前田実殿
斉藤和也殿

大場光郎殿
高柳信次郎殿
清水豊三殿
木林奈津殿
石丸熊蔵殿
荻原良子殿
八田忠男殿
津田康平殿
中藪雅応殿
栗山アキ殿
すゞ殿
大島十志夫殿
犬山忠男殿
佐野毅殿
浜田義郎殿
建石五一郎殿
杉下栄子殿
道浄瑞穂殿
北口富一殿

渡辺益祥殿
大重孝行殿
今井知子殿
杉岡省市殿
小川君枝殿
新山平八郎殿
戸田勇殿
御山富士子殿
御山実殿
中村憲次殿
中山茂殿
井上虎之助殿
小林ひで子殿
小林三郎殿
石川三之助殿
滝沢義春殿
山上吉平殿
荒川藤作殿
梅原たま・光子殿

島野吉春殿
大谷銀之助殿
木村力雄殿
田中節子殿
大森八郎・達雄
和之・秀雄殿
奥田両一殿
小林秀次郎殿
河村善三郎殿
長田金市殿
和泉良子殿
内山憲一殿
斎藤信三殿
荒井克行殿
内田慶太郎
昇三殿
白川六郎殿
巴文ミ殿
市川隆樹殿

小川和市殿
岡田庄一郎殿
吉富一臣殿
酒井重良殿
竜野亘殿
川崎清一郎殿
福田勇殿
左右栄藤殿
横山源助殿
徳田勇雄殿
田中金之助殿
上森昌次殿
平尾清殿
中西政行殿
西田弘太郎殿
森永徳裕殿
内田起三殿
奈須田ゆき殿
魚住金弥殿

正真藤代殿
守田正平殿
三堀俊男殿
八色広明殿
片岡幸男殿
清水一郎殿
杉村哲也殿
石田英太幸殿
北浩殿
大島八郎殿
岡村茂殿
高部親翁殿
三矢謹吾殿
宮城末吉殿
倉友亮治殿
松縄俊夫殿
八島輝夫殿
木沢芳典殿

片山忠雄殿
河端善孝殿
松倉得次殿
木村豊一殿
小林益三郎殿
内田清之助殿
花子殿
宇野盛次郎殿
浅香栄之助殿
吉永美枝殿
中野秀夫殿
斎藤定雄殿
柳藤太郎殿
松野靖也殿
島本喜平殿
丸山実殿
村田晴一殿
島田耕三郎殿
玉利家殿

波塚竹雄殿
丸山美代子殿
吉氷光雄殿
中佐良次郎殿
印牧キク殿
大倉道昭殿
清水市三殿
江沢茂殿
片岡禎一郎殿
塚田庄太郎殿
島田たき殿
井上貫一殿
坪内才吉殿
谷口吉松殿
高三松造殿
坂三之助殿
荻原昇次殿
森本しげ殿
高橋静雄殿

鶴田伊一殿
鶴田英正殿
小川広治殿
風間徳太郎殿
内田和夫殿
瀬川誠一殿
小沢家殿
八木里志殿
岡茂樹殿
野田キヌ殿
寺内常次郎殿
大塚茂殿
宇野博二殿
志太トシ殿
小林捨次郎殿
西山太郎殿
岩谷鷹二殿
鹿子武保殿
小林益太郎殿

飯塚サダ殿
田島明久殿
穴田栄吉郎殿
中川一雄殿
矢竹良平殿
畔柳角太郎殿
御山光殿
提賢太郎殿
中出タケ殿
富山三郎殿
中島正子殿
増田功殿
松崎尚支殿
佐伯玉吉殿
鬼塚さく殿
坂口喜一郎殿
坪ノ内雅雄殿
藤田吉広殿
守田康弘殿

加藤つね殿
佐野ヤエ子殿
宮島藤枝殿
道鎮実殿
荒井義道殿
ハセ殿
小坂家殿
加藤周蔵殿
内山芳作殿
飯島和夫殿
白石勇殿
倉友文太郎殿
服部きみ子殿
高尾茂殿
慶国彦殿
ボーイスカウト
東京第四五団殿
中川定市殿
安居福恵殿

表紙題字「善永」

現門主　大谷光照　猊下御染筆

菅野庄三郎殿
浅田浅男殿
高岡竹夫殿
麻生静子殿
目片律夫殿
東　健一殿
馬場金作殿
広川重雄殿
戸村てる殿
出山かね殿
滝沢タカ殿
木村　博殿
山崎初子殿
会津隆司殿
吉川石材店殿
吉原徳次殿
菊池洋一殿